



手作り「みかんの葉茶」

茨城で手もみを学んだ「みかんの葉茶」の挑戦

○「みかんの葉茶」の苦労とフェスでの手応えは？

コンテストの準グランプリがめちゃめちゃ悔しかった。提案したプランの一つ「みかんの葉茶」を形にしたいと、茨城県で手もみを学びましたが、みかんの葉はバリバリに割れてしまい悪戦苦闘。自分たちでも「正直美味しい、漢方そのもの」という味でしたが、東京のフェスに出展すると、逆に「漢方っぽくて良い」と大好評。完璧な味じゃないからこそ、「全家庭に苗木が配られた歴史」を伝える最高のきっかけになりました。

学生だからこそできる「繋ぎ役」として

○ 現在も広野町へ通い続けている原動力は何ですか？

自分の考えたことやアイデアをまちの方と一緒に話して、現場で実際に形になる体験はすごくいいなと感じています。何より広野は居心地がいいんです。いつも泊まる旅館は、まるでおじいちゃん・おばあちゃんの家に戻ってきたみたいで。町内の中華屋に行くと、来店2～3回目なのに顔を覚えてくれていました。よそ者の学生だからこそ、みんなの間をフラットに繋ぐハブ（繋ぎ役）になれたらと思っています。



東京のフェス出展

外から見て気づいた、広野町の隠れた資源

○ 外からの視点で感じる、広野町の魅力とは？

町民の皆さんが「当たり前」と思っている日常に、凄い価値があります。1つ目は、栽培農家ではなく「各家庭の庭先にみかんの木がある」事実。都会の人に言うと驚かれます。2つ目は、山奥に湧く「鉱泉」の水質。肌がツルツとするのは普通の水じゃ表現できません。3つ目は、都会なら高値がつく美味しい「露地栽培の野菜」。パッと「スイカどうぞ」ともらえる豊かさは、隠された凄い資源です。

象徴である「みかん」を、これからも一緒に

いつもまちに来た時に色々な方に良くしていただいて、本当にありがとうございます。私たちの活動を通して「学生がなんか頑張ってるな」と、町民の皆さんに少しでも見守っていただけたら嬉しいです。

広野町の象徴が「みかん」であることは、歴史的に絶対に変えられない強みです。社会人になっても、週末ボランティアや、純粋に旅館や中華屋の美味しいご飯を食べに「ただいま」と帰ってきます。次の若い学生たちへこの仕組みを手渡す窓口になりながら、これからも広野に関わり続けます！



＼WEBサイト／



＼Instagram／



インタビュー内容は町公式ウェブサイトで！

お二人の体験や、みかん茶づくりの詳しい試行錯誤のエピソードなど、詳細な内容は町ウェブサイトからご覧いただけます。



広野みかんの取り組み



増田 和俊さん

川崎 愛香さん

アイデアが実際に形になる

その体験がすごい

「学生ユニット「黄色い小鳥」が語る広野町

「大学生観光まちづくりコンテスト2024」で準グランプリに輝き、その後も広野町へ通い続けている大学院生の川崎愛香さんと増田和俊さん。大学の専攻も異なる二人が、なぜ広野町に通い、町のキーパーソンと町民を巻き込む存在になったのか。二人が語ってくれた、リアルな声をお届けします。

たくさんの冊子の中で際立った「1枚のチラシ」

○ 多くの自治体がある中で、なぜ広野町を選んだのですか？

コンテストの事前説明会で、他自治体の豊富な冊子が並ぶ中、広野町だけはクリアファイルにチラシ1枚だけでした。薄くて逆に気になり調べてみると、地域のために熱意を持って活動している人がたくさんいる。そのギャップに惹かれたのがきっかけです。ユニット名の「黄色い小鳥」は福島県の県鳥キビタキが由来ですが、実は最初は「とにかく名前を登録しなきゃ」と付けたものでした。



コンテスト本選での発表



五社山からの景色

五社山へのドライブと、温かい町民の皆さん

○ 初めて町を訪れた時の印象と思い出を教えてください。

「海と山の音が両方聞こえて綺麗だな」という第一印象から始まった広野の滞在。車を持たない私たちは徒歩で巡っていましたが、3日目には町民の方の車に乗せてもらい、五社山・常平へのドライブ。「この道、すれ違えないぞ。」というドキドキもしましたが、気さくに声をかけて乗せてくれる温かい優しさに触れ、町民の皆さんとの距離がぐっと近くなりました。